



同志社人物誌 (27)

山 川 均

山 川 菊 栄

同志社をとび出す

明治二十八年の春、山川均は郷里倉敷の高等小学を出るとすぐ同志社普通部（中学）へ入学した。そのころはまだ関西以西に高等教育の機関はなく、同志社の名声実力は西日本を抑えていた上に、長姉の夫、林源十郎が同志社に学び、家事の都合で明治二十年ごろ中

退し、代々の家業である薬店の経営に当たったが、新島襄の影響をふかくうけて、熱心な信者として行動し、そのすずめで山川は同志社に入学したのだった。山川はそこでの二年間しかまともな学生生活はしなかったの、十五、六歳のいわゆる人格形成期における同志社の生活は彼の一生に少なくない影響を及ぼしたことを思う。当時は新島襄はすでに亡く、

同志社の衰えた時代ではあっても、その遺風としての理想主義的気分はなお残っており、それを慕って子弟を入学させた父兄も多かったであろう。山川が在学したのは明治二十八年から三十年までの二年間にすぎなかったが、この間に小学時代からもちつづけた物理学者となる夢がたちまち志士気分、英雄気分になってしまった。それほど、当時、同志社には天下国家を論ずる傾向が強かったものと後年笑って語ったものであった。

山川が同志社時代に得た二人の友だちがある。一人は浜田仁左衛門といい、鹿児島県国分の出で、明治三十年、山川と一所に、十年後革命のために手をたずさえて働こうと誓って別れた人、も一人は同志社から札幌農学校に進み、有島武郎の親友で大正中期から昭和初期にかけて叢文閣という特色ある出版社をいとなんだ、奇骨りょうりょうたる人物、足助素一だった。

山川が同志社を中退したのは文部省の学制改革で聖書が正課たることを禁ぜられ、教育勅語を中心とする修身科の設けられたこと、つまり教育の官僚統制を憤った結果だったがこれは日本中どの学校へいっても同じこと

で、同志社をやめても日本はビクともしないわけだが、その時は大義のために必死の戦いをしているつもりだった。この主張に同意した友人は多くてもいよいよ退学を実行する段になると、志をかえなかったのは浜田ともう一人、倉敷の小学校時代からの同級生で、藤波という少年だけだった。藤波は帰郷後、家業の紙屋をついでいたが、早く病没した。

浜田は郷里の同じ郡に同志社の先輩が二人もあつたところから、汽車もない時代に、はるばると鹿兒島から京都まで遊学したのだった。彼はまだ母の胎内にいるとき、県庁の吏員であつた父が西郷軍に虐殺され、没落地主の若後家の一人息子として育つた。京都から帰郷したが最後、母に泣きつかれて再び家を出られず、そのまま郷里に留まり、地方の青年を教育したり、大逆事件からは常尾行の身となりながら、大正中期から農民運動の先頭に立ったりしているうち病に倒れ、昭和四年に没した。夫人は山川のすいせんした岡山の人で、才氣かん養、明治末期に鹿兒島最初の婦人記者として活動し五人の子女をかかえて晩年までよく働きつづけた。

山川は退学して帰郷する前に、同志社で教

えをうけた柏木義國氏の自宅にしばらく世話になつていたが、氏の誠実な人柄には推服していた。帰郷して上京するとき、義兄林がすすめた先輩の相談相手は秋山定輔だった。義兄は同じ倉敷の人で家が近く少年時代の友達だったというだけで秋山を信用していたものだろうが、秋山は才子ではあつたがわかい学生を指導する人格識見をもつには遠く、政界財界の有力者の間をおよぎまわつて名を売りはでな生活をしているいわゆる怪物の一種で、二六新聞の社主、日露戦争の当時には「露探」としてさわがれた。これは中傷にすぎなかつたというが、その後、表面にはきこえなくなつたが、素行不良と贅沢な生活に変わりなかつたらしい。

山川はこの人の家に下宿して守田有秋というこれも良い友人を得た。そして秋山のすすめて明治義会中学という中学の三年に編入された。私は結婚後、彼が明治義会に一時たりとも在学したというので肝をつぶした。そしてそのことは母や姉にはついに話さなかつた。その中学は私の実家から一丁あるかなしの今の法政大学の敷地の中にあつたが、当時の言葉でいう「ダラク学生」の学校で、今の非行

少年の巣のように思われていた。角袖のきものをきた、大人のような生徒が多く、へびをつかんで土手の松にピシリピシリぶつけないが歩いたり、女や子供を追いかけるといふので、女中が使いに出るにも、門の外をみて、明治義会の生徒のいないのを確かめてから出るというほどだった。

同志社からきた山川は同じ学校とはいへ、あまりのちがいににおどろき、まもなく退学してしまつた。秋山はここで中学卒業の資格をとつて一高から東大へ進めといつたというが秋山自身、教育一般についても、明治義会の内容についても何も知らず、全く無責任無関心だつたらしい。たぶん文部省の学制改革で教育課程や教員の資格が規定され、この学校はそれに添うことができなかったのであろう。日露戦争のころにはなくなつていたと思う。もし山川がこういう学校に満足して長くどどまっていたとすれば、勉強ぎらいのダラク書生におちこむほかなかつたであらう。

また郷里の堅実な家庭や同志社の純潔な気風の中に育つた素朴な田舎出の少年にとつて、秋山のようなすれつからしの怪物の生活は不可解かつ不快をきわめたものにみえたの

もあやしむにたりない。結局山川はその家も不満で守田をさそつてとび出し、いわゆる「放浪学生」になつていたずらに悲憤慷慨、革命を夢みながら神田乃武の国民英語学会などへ入り、はんばな勉強をしていた。

明治三十三年の春、山川は友人たちと「青年の福音」というタブロイド版の月刊紙を出していたが、その第三号に、守田の筆による貴族の結婚批判の一文が出た。結婚は当事者同士の愛情によるもので、貴族の社会にありがちな第三者の強制によるべきものではないという抽象的な内容のもので全国的な祝賀の中にその五月十日、執行せられる東宮ご成婚―大正天皇結婚―には直接一言もふれていなかった。しかし、まだ十七歳の文学少年らしくいかにもセンチメンタルな感傷に満ちた筆致はおのずからそれと察せられるものがあった。当時、皇太子の心身の病弱は知れ渡つたことで、「奥さんは大役だ」という言葉を十歳未満の私もきいていたし、同じ小学生の中でも「お嫁さんがたいへんお泣きになったときいた」ともきいたくらい、十七歳の花嫁への同情はあつた。

山川が加筆したこの一文故に日本最初の不

敬罪として起訴された山川、守田は未成年なるが故に最長五年の刑期を三年半に減せられて服罪した。入獄中に山川は今まで気負つてばかりいて何一つまともな勉強をせず、実力がゼロなのを深く反省し、勉強しなむす計画をたて、英語は改めて初歩の文法から学び直した。何事にもズボラでなく、精密で念入りの性格のためでもあろう、同志社で中学半ば程度の授業をうけたばかりは、獄中の独学にすぎなかつたにもせよ、彼の英語の読み方は実に正確でごまかしがなかつた。「僕は官費で勉強したんだ」とよく笑つて話したものだつた。

語学のほかに彼は社会主義の勉強をしようとしたが、順序としてまず経済学史をよみ、次にブルジョア経済学をマスターするの必要を認め、郷里に頼んでその原書をさし入れてもらい、獄則によりきめられた仕事のノルマを片づけては読書にふけた。夜は五燭のうすぐらい電燈が高い天井からぶらさがり、床まではるくに光線が届かないので、看守のまわってくる隙をみてはつたつた本を読んだ。普通には坐っているか、夜ならせんべいぶとんにくるまつて寝ていないと反則で罰せ

られるからである。山川は子供のころから病弱で一生やせこけており、貧血でひどい寒がりだったが、監獄の話をすることに何が苦しいといつてあの寒さほどつらいものはないかと、とよく話した。最初の入獄はまだ二十歳そこそこの血気さかんな年ごろではあつたが寒いさかりに真夜中におきて立ちながら本を読むとき、本をもつ手が骨まで凍るよう。しもやけが両手にできてくずれたあとが、今でも寒い日には痛むようだ、七十をこえてもそのあとをよくさすつていたものである。

山川は少年の客気で夢中で同志社をたびたび具体的な計画もなしに漫然と東京へ出た当時のことを、生涯の中で危険の上ない時代だつたといつていた。そして思いもよらぬ入獄によつて反省と勉強の機会を与えられたことで救われたようなものだともいっていた。しかしこの危機が反省の代りに絶望や自ほう自棄をもたらしたら彼の前途は暗であつたらう。当時彼の作つていたグループはいずれも食うや食わずで労働していた苦学生ばかりだつたにもかかわらず、まことに純なまじめな青年たちだつたらしく、突如として山川守田が不敬漢として警察にひかれ、全国の新

聞の袋だたきにあい、狂人あつかいされ、郷里の父は糸屋の店をとして表戸に青竹をぶちがえにうちつけて謹慎の意を表し、幼ない甥たちは学校を休学せねばならなかったという騒ぎの中にも、このグループの貧しい青年たちは、恐れずに山川たちに面会を求めたり慰めたりはげましたり、変わらぬ友情を示した。雑誌の発行者で熱心なクリスチャンの若林は山川らと共に捕われて未決に収容され、一年後無罪釈放となったが、その間、十六歳の実弟一人で店を守っていた。兄若林は病に世を去ったが、当時十六歳の少年はいま八十をはるかにこえて富山県に健在でいる。同志社を共に去った浜田は借金の上に借金を重ねてはるばる鹿兒島から上京し、未決でチフスのため絶望とみられて保釈、入院した山川の退院後、しばらく大森海岸に同居して健康の回復するのを助けた。

薬屋の店員として

山川は明治三十七年六月、刑期を終えて郷里すると義兄が岡山市に開いたばかりのおろし小売の薬の支店をあずかることになった。のちにはそこが本店となって盛んになったが

開店早々のころは高等小学卒業の少年店員二名に山川と家政婦だけであった。その少年店員の一人は今も健在で、倉敷で薬店を経営しているが、その話では、はじめ倉敷の支店へ行く話のあったとき、義兄の武用というのが、同志社出身で山川を知っており「あの人はいい人だ、私も一所にベースなんかしたことがあるあの人ならいいから一所に働きなさい」といったということを山川の没後聞いた。ベースとはベースボールすなわち野球のこと、明治時代には野球とはいわなかった。山川は同志社でボートも覚えたが野球も少しはやったとみえ、どちらも日本ではごく珍しかっただろうが、とにかく晩年まで野球には興味をもって、ラジオやテレビができてからは六大学野球など欠かさず聞いたものだった。わざわざ東京まで見にいったのは、子供の相手でただ一度ぐらいだったか。

薬のことはまるで知らず、薬剤師の資格もないものが薬店を営めた時代だからのききなように骨がおれた。むつかしい薬の名前や性能を暗記する一方、午前中二人の少年店員を医院や病院、小売店へ薬の御用聞きに出し、午後注文品をとどけ、その間、店に来るお客

の応接やら、夜は大戸をしめてから少年たちに英語を教え、一日の決算をして二階の寝室にひきとるのは十一時ごろだったらしい。店の者の健康にも気をつけ、よく万事に世話がとどいて申分なかったと兄の方でもいえば、一所に働いた店員は山川の没後涙におぼれて物のいえないほど、当時をなつかしがった。

そのころ岡山にはいろは倶楽部というクリスチャンや社会改良家や、自由民権論の生き残りのような政治好きや社会主義者の作っている団体があって、ときどき講演会を開いていた。警察でとったその会員のリストの中にはまだ大学生だった星島二郎兄弟や、当時県立岡山病院の薬剤師で、山川の上京後、その後任として林の岡山の主任となった人物の名もある。これはいずれもクリスチャンだが、後に大逆事件の犠牲者となった森近運平の名があるのは特に注意をひく。

森近運平は倉敷から遠くない小さな町の自作農の出で、農学校を出てから岡山県庁の農政関係の部門に勤めていた。日露戦争が起ると反戦論をふりかざし、駅で出征兵の一ぱい乗っている窓によっては「死ぬなよ、生きて帰れよ」と、一人一人に力をこめて話しかけ

た。県の命令で農村に軍事公債を売りこみに出張させられると、農民の集会で、「こんなもの買うな」とあべこべの宣伝をした。知事が彼を呼んで、自分の命令に従わぬなら、今すぐここで辞表を出せという、すぐ辞表を書いて室を去った。

この人がいろは俱樂部を牛耳っていたが、山川は岡山在住中はあまり往来せず、後に日刊平民時代から親交をもつようになった。山川はいろは俱樂部の講演に一、二度顔を出したことがあるそうで、そのころの熱心な会員で、山川の没後まもなく亡くなった道具屋の主人は、こんなことを話した。

「山川さんのお話は少し学問的で、ごく俗な話しか聞きなれていなかった私ども無学な者にはちとむづかしい気がしました。しかし今もよく覚えているのは、社会主義者は、自分が社会主義者だということだけで人よりえらいつもりでいい気になってはいけません。社会主義であるほかに世間の役に立つ人間にならう、といわれたことでした。」

これは、山川がああ最初の入獄当時、省みてただ英雄気分、志士気分酔っているだけで何一つ学んでいなかった空虚な自分を省み

て恥じかつ恐れたとき以来、常に自分を戒めるために忘れない言葉だった。山川は初めてまみえた郷里の青年たちにこれをおくりものとしたものであろう。

そのころの商店員はお仕着せの手織のシマもめんの角袖のきものに角帯、前垂れがけという服装が制服ともいふべきもので、羽織は十年ぐらい働いて手代とか番頭とかいわれる地位につくまで着ることを許されなかった。山川は使用人ではなかったが、前垂をかけただけで、あとは他の店員と同じ服装で働き食事も同じだった。が、「山川さんは胃が弱いというのでお昼だけはパンに牛乳でした」と昔の店員は語る。

「あのころの山川さんは店の仕事がいっぱいで本なんかよむひまはなかったでしょうがね。読んだとすれば皆が寝てからでしょう」と当時の店員は語り、甥もこう話した。

「あのころの叔父さんはまだ社会主義じゃなくて、嫁さんの話がうまくまとまればあのまま店におちついていたはずですよ。東京へいって平民新聞に関係したので社会主義になったんです。」

山川が人の寝静まったあと、資本論による

ふけっていることはしらず、嫁をもたせて一生その店におちつかせたいのは兄一家の希望だったが、その嫁の候補者は父の反対でたち消えた。しかし山川自身は、安全ではあるがその生活に甘んずるつもりはなく、適当な機会に独立して運動に参加するため、明治三十九年出獄後一面識のあった幸徳秋水の滞米中に書をよせて、自分もそちらへ行きたいから便宜を計ってほしいと望んだ。しかし秋水は米国へきても仕方がないことわった代り、その年十二月、日刊平民新聞の発行に際して山川の出京を促し、ここに山川ははじめて多年夢みていた社会主義運動に参加する機会を与えられたのだ。この年二月、日本社会党が成立するとすぐ、かの同志社以来の盟友だった浜田とも手をたずさえて入党した。

日刊平民新聞から赤旗事件まで

明治四十年一月十五日創刊の日刊平民は堺幸徳が中心で、山川は諸外国の社会主義運動の紹介やら日本の政治経済情勢の批判分析等手のないこととて片端から仕事をしよいこんだが、二月中旬、社会党大会の記事で発禁、ついで四月十三日発行停止の直前、自発的に

解消した。このころ運動の内部は幸徳の無政府共產主義―直接行動、議会否認と片山潜一派の議会中心―改良主義との対立が深刻化していった。とはいってもどちらも大衆の間に基盤はないので、観念的な論争にとどまったではあるが。ただし堺はひとり正統派マルクス主義を唱えてどちらにもかたよらなかつたが、運動の上では幸徳と共に左派をなし、山川もそれに属していた。日平民の消えたあと、両派は別々の機関誌を出し、左派は大坂で森近運平発行の小型の半月刊「大阪平民新聞」に執筆し、それを日本平民新聞として左派の正式の機関新聞にしようとしていた。山川はこの紙上に資本論の解説を連載しているが、これが日本で資本論の紹介された最初のものらしい。その英訳資本論は山川が入獄中から宝物のようにして手許から放さず、出獄後、岡山の店員時代に皆が寝静まってようやく自分の時間となつてから、寝室にあてられていた二階の六畳で、何年もの間、待望のペーシジにはじめて手をふれ、むさぼるようによみふけたものだった。今とはちがつて誰に質問しようもなく、字書をひいては考え、考へては読み直し、一から十まで独学で学んだ

資本論であり、社会主義であった。

日平民の廃刊になった後、八月から堺、幸徳、山川は金曜社というグループを作って社会主義の講演会を開いた。幸徳が金曜社と毛筆で書いた二十二、三センチに十五センチぐらいの長方形の本の標札は山川が残したまま、今も私の家にあるが、明治四十一年一月この金曜社の本郷での講演会で警察との衝突となつて、堺、大杉、山川らが一カ月半の禁錮に処せられた。四月出獄すると六月には、赤旗事件で彼らは二年、荒畑、村木源次郎(震災後福田大将狙撃事件で獄死)ら未成年者は一年服罪した。事件はまことに子供ばいもので、神田錦輝館で開かれた山口孤剣の出獄歓迎会の散会后に、片山ら右派に対するデモの試みとして、大杉ら少数のアナキストがひそかに用意した赤旗をふつたのが、警官隊との争奪戦のマトになり、事件に関係のなかつた堺、山川らもまきぞえをくつたというだけのことだった。大杉は後年、「あれは

全く僕ら若い者のちょっとしたイタズラで、とぼつちりをくつた堺や山川には全く気の毒でした。しかし堺があのことでした一度も



戦後、同志社を訪れた山川氏(中央の人)

ぐちや小言をいったことがないのは感心ですよ」といったが、そのころの大杉は感情的に堺を敵視し、思想的な対立のみならず、常に罵倒したので、この言葉が特に私には印象が強かった。

山川は一人息子で両親をせわする立場にあり、明治四十三年十月赤旗事件の刑を終えて出獄すると岡山県宇野港に義兄の用意したささやかな薬店を開いて両親をひきとった。同年幸徳一派の大逆事件が起こり、翌四十四年一月大量的な死刑がおこなわれた。赤旗事件のために入獄していたものは幸いに災いをまぬかれたが、当時大阪にいて赤旗事件の難をのがれ、運動の潰滅のために郷里岡山の農村に帰って農業改良事業に専心していた森近運平は、不幸にも幸徳と運命を共にした。森近は彼と意見を異にし、幸徳とは一所に運動しない。堺、山川が出所するのを待って一所にやる、といっており、無罪を確信していたという。山川は彼の死をいたみ、その質実で経営能力に富む人柄を惜しみ、後年運動がさかなくなるにつれ「森近がいたら」とよく嘆いたものであった。山川はとかく初期の運動に英雄気分の口舌の徒が多かったことを嘆き、真

に大衆と共に生き、大衆の中に根をはる仕事のできる人として、いつも森近の名を口にしたものであった。

山川は両親への孝養もさることながら、これきり運動をすてる気にはならなかった。といつて出ることに入獄さわきで両親や姉夫婦に迷惑をかけていることで、出京の諒解はむつかしいと見、鹿兒島の浜田家で山羊を飼っているのに暗示をえて、一つには桜島の噴火見舞に―実は身上相談かたがた―回家を訪うたついでに見た八幡製鉄の近代工業の姿をみて、そこで新しい運動に入りたいと思った。男では話がむつかしくなることを案じて、郷里が岡山なのを幸に浜田夫人は幼児を負うて帰郷し、そのついでということで林夫妻と山川の両親を訪うて、山川を宇野から解放し、九州で山羊牧場を営ませることを提案した。この外交交渉が成功して山川は郷里を出、一時九州に行つて、義兄の不満をおしきつて出京したのが大正五年一月だった。

彼は堺の経営する売文社に入り、月刊「新社会」の編集員となり、しきりに執筆したが大正八年、米騒動の翌年まではまだ市販の雑誌に本名で書くことはできなかった。その米

騒動の前に、荒畑寒村と共に彼が毎月労働者のための配付用に四回ほど発行した「青服」と題する、労働者の団結をすすめたリーフレットは、毎号発禁となり、最後にそのため四月禁錮となった。

大正六年三月ロシア革命が起こり、その影響は大きく、大正三年以来の第一次大戦の影響で日本資本主義は急速な発展をとげ、それに伴って労働運動がめざめて、それと合体した社会主義運動は、はじめて大衆の基盤の上に進路を開拓した。しかし山川は満足していたことがなかった。彼はその青年時代と同様に社会主義者であることに優越感をもつことに満足し、人として他に役にたつ仕事のできる者が多くならなくては、運動は成長し難いといっていた。またとかく若い人は、少し形勢がいいと明日にも革命が成就するように樂觀する。そして少し形勢がわるいとたちまちべしゃんこなつてしまふ。とかく動揺しすぎ。長い間にはいいこともある、悪いこともある、あわてないことだ、といっていた。彼逝いて十年。思い出は尽きないが今はその前半生の、とくに青年時代のことを書かせていただくとどめる。(山川均氏未亡人)